

「内申エリート」と塾の功罪2008年

「内申エリート」以前のセミナー通信でも書きました。一般的な言葉ではありません。内申点（通知表の評定）が本人の実力よりかなり高い生徒のことを言います。通知表は本当に不思議なもので、私達塾教師から見ればとてもそんな実力は無い生徒が意外にいい成績を取っていたり、また逆に実力があるのに通知表では評価されないなどのケースがよくあります。

ここまで読んで、「内申エリートとは自分のことだ。」と思った塾生も多いのではないのでしょうか。それもそのはずです。今、ほとんどの塾生がまさに内申エリートなのですから。何によって量れるかといいますと、全員に受けてもらっている全県模試の全県評定です。10月（中3は今月）にお渡しした模試結果プリントの内申点の欄を見てください。県内1万人～2万人中の相対的評価を見れば、自分の本当の実力がわかります。

なぜ今、ニュータウンの学校の上位層は内申エリートになっているのでしょうか。この原因を一つに決めつけることはできないのですが、その一つに最近の定期テストが簡単になっていることが挙げられます。異論のある方もいらっしゃるでしょうが、私は平均点が70点を超えるようなテストでは実力を正しく判定できないと思います。80点や90点台が人数の最大ピークになるテストではごく些細なミスがまさに命取りになります。出題範囲の限定された定期テストで大きくミスさえしなければ「4」や「5」が転がり込んでくるのです。

熱心な指導の塾ならば、こうしたテストは最適です。難問に挑戦させるよりも、確実に出題されるような基本の反復練習で限りなく100点が狙えるからです。「成績が上がり、生徒も喜ぶからそれでいいじゃないか」とも思うのですが、自分の実力を過信して高校を選び、そこで落ちこぼれたケースを少なからず知っているだけに、まさにこれは塾の功罪であると思います。

もちろん「だから安全圏しか狙うな」などと言いたいのではありません。「5」を取ったからもういい」とか、「私は「4」で十分」などと気持ちの上で“停滞”してほしくないのです。良い評定をもらった責任として、自分にその実力が備わっているか、その評価をもらうべき努力をし続けているか、常に自問自答して欲しいのです。「5」や「4」を取ることが最終の目的ではなく、どんな評定であれその評価にふさわしい自分であろうと努力する、または自分の実力にふさわしい評価を取るためにがんばる塾生を手助けするのが塾の役目だと思っています。

「内申エリート」が悪いのではなく、それは学校の先生らのあなたに対する期待の大きさと考えて、実力アップに精進して行ってください。